

ふるさと 幸福論

北奥羽の未来像

地域住民同士の触れ合いや助け合いは、地方の魅力や象徴するイメージとして定着しており、北奥羽地方でも東日本大震災では、住民同士の「共助」が目されるなど、地域組織の重要性が見直されつつある。だが、町内会や自治会は、ライフスタイルや価値観の多様化を背景に、加入者が減少しているのも事実で、このままでは地域のつながりが希薄化しかねない。一方で従来の枠組みにとらわれず、インターネットや企業の力を活用する動きも出ている。時代に合ったコミュニティの在り方を探る。
(田村祐子、岩館貴俊)

コミュニティ再考

つながり どう 守る

これまで地域コミュニティの中心を担ってきた町内会、地域の美化活動や除雪など、住民同士の協力で自らの地域を住みやすくするのが本来の役割だが、ライフスタイルや家族構成の変化で加入率が低下するなど、転換期を迎えている。

□ □

八戸市内の一戸建てに夫、就学前の長男と暮らす30代の女性は、1年前のその出来事を思い出すたびに、不愉快な気持ちになる。

□ □

平日の夕食時、自宅のインターホンが鳴った。「近所です」町内会に入っていないのはお宅だけ。入らなければごみ集積所に鍵を掛け出さないようにする。唐突に加入を求めてきた「町内会役員」と名乗る男性の言葉に、威圧感を感じた。

□ □

共働きで忙しく、行事には参加しにくい。年間5千円近い会費は家計に負担

で、何の活動に使われるのかも疑問だった。それでも子どもが小学生になったら加入しようと考え、別の役



町内会関係者が加入率低下への危機感を訴えた
連合町内会連絡協議会3月、八戸市庁

転換期迎える町内会



夕食時の訪問は翌日も続き、「加入を待って」と訴えたが、「お宅だけ払わないのは不公平。今すぐ加入して」の一点張りだった。困り果てて市に相談するも訪問はやみ。ごみ集積所は「正直、町内会に良くないイメージを持った。また責められるのではないかと、ヒクヒクして過剰な

員の了承を得たはずだった。夕食時の訪問は翌日も続き、「加入を待って」と訴えたが、「お宅だけ払わないのは不公平。今すぐ加入して」の一点張りだった。困り果てて市に相談するも訪問はやみ。ごみ集積所は「正直、町内会に良くないイメージを持った。また責められるのではないかと、ヒクヒクして過剰な

町内会長の小金山和人さん(69)によると、住民同士のコミュニケーションが減り、地区の情報が入らなくなった。ごみ集積所は散らかり放題で、防犯灯は切れたまま。「このままではいけない」と思った」と振り返る。

現在約90世帯が加入。女性を含む役員が定期的に意見交換し、活動を充実させてきた。会長の仕事は多忙だが、小金山さんは「やはり住民同士助け合いが必要。再開して良かった」と実感を込める。

八戸学院大の齊藤綾美准教授(社会学)は「公書などの問題が多かった時代と違い、行政サービスが充実している現代は、地域で結束する必要性を感じにくい。町内会の担い手は60、70代の男性が中心で、若者や女性が入りにくい部分もある」と指摘する。

その上で、「人口が減少する中、住民の力は重要。難しい事だが、担い手自身が『楽しい』と感じられる活動を行い、異なる年代や立場の人材を意識して取り込むべきだ」と、町内会の在り方を変えていく必要性を示唆した。